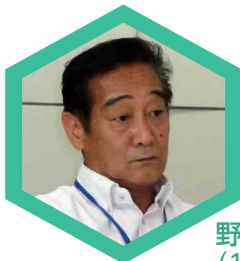


幾多の困難を乗り越えて

■参加者



渡辺達男
(1973年入社)



野村浩
(1983年入社)



加藤美智雄
(1988年入社)



中島秀治社長
(1986年入社)

※トビー君には語り継いでもらうために、今回のテーマでは議事録をお願いしました。

■司会



川幡映実
(2011年入社)

川幡：本書は東邦運輸の50年間の歩みを後世に残すことが目的です。本当は輝かしい功績ばかりを載せたいのですが、企業が継続していくあいだにはよいことばかりがあったわけではありません。しかしそれを包み隠さずに述べ、将来の糧とすることも、この本の役割であり、東邦運輸のチャレンジ精神にも適うのではないかと思います。

大事故に誠意を尽くして—静岡重大事故

川幡：まずは2000年9月7日に起きた静岡重大事故についてお話をください。

渡辺：当時、私が所長を務めていた静岡営業所から所沢へ納品に行った復路での事故です。中央自動車道の富士急ハイランド付近を走行中に、低速で走っていた乗用車に当社のトラックが追突し、乗用車が炎上。乗っていた6人のうちお二人が亡くなり、4人が重傷を負われました。

野村：乗っていた方々はご家族と子供さんのお友だちでした。お友だちは台湾から遊びに来ていた方でした。

た。

渡辺：東邦運輸のトラックがこれほどの重大事故を起こしたのは、これが初めてでした。会長と野村部長は、亡くなられた台湾の方のお身内が来日されたのでその交渉にあたり、社長と早尾が重傷者の入院先へ向かい、謝罪しました。

野村：台湾出身だったホテルの女将に通訳を依頼しました。台湾の風習だと思うのですが、お身内といっても親戚一同20人くらいが大挙してやってきたものですから、会長も苦慮していました。しかし私たちの起こした事故ですから、誠実に対応させていただきました。

渡辺：3日後くらいに事故現場近くの斎場で葬儀が執り行われました。

野村：これも台湾の風習なのだそうですが、葬儀のまえに、亡くなられた場所でお祓いを挙行了しました。本来なら高速道路は通行止めにはできないのですが、警察と話し合って特別に許可していただき、事故現場にマイクロバスで乗りつけました。台湾のメディアの人々も来ていました。

——会社として刑事責任は問われなかったのですか？

渡辺：ちょうど葬儀の日だったと思います。警察が静岡営業所の家宅捜索を行いました。その後も、所轄の大月警察署へ何度も呼びだされ、終日、事情聴取を受けました。

中島社長：私も5、6回呼び出しを受けました。最終的には、会社に対する行政処分等はなく、刑事責任も問われませんでした。

——事件を機に、社内の体制を見直すなどはあったのでしょうか？

渡辺：会社として責任は追及されませんでした。労働時間の長さを指摘されました。そこで、静岡営業所から長野県や三重県といった長い距離を運ぶ仕事は断るようになりました。往復300～400キロなので、長距離トラックなら、割り切って休憩をとるところをつい無理してしまうんです。

中島社長：死傷者を出してしまったということで、当時の責任者だった渡辺室長を始めとして、会長も、精神的に相当堪えましたね。会社としては二度とこのようなことを起こさないように、採用や人事面を含めて、常に安全第一で仕事に取り組んでいこうという姿勢を再度確認しました。

働かせ方改革のきっかけ—連続放火事件

川幡：2つめに取り上げるのは、2006年から2007年にかけて起きた連続放火事件です。

野村：当時、私は立川営業所所長でしたので、ごまかなことはわかりません。聞いた話では、引越代金を着服した元従業員が、証拠隠滅のために、事務所の中にシュレッダーの紙屑と灯油をまき、火をつけたということです。一番燃えていたのが、引越の経理担当のデスクだったらしいです。

中島社長：どうもおかしな数字があると私や専務が気づいて、社内で調べ始めていた時でした。

野村：それが1度目でした。2度目は事務所の外に火をつけられました。配電盤の近くだったので、回

路がショートしたのかと考えたのですが、そんな形跡もない。しかし警察や消防署が動いてくれたおかげで、それからしばらくは何も起きませんでした。ところが今度は放火ではなく、怪文書が本社にばらまかれるようになったんです。「次は立川だ」などという脅迫文とカッターナイフの刃を同封した手紙だったと思います。

——そして3度目が起きた。

野村：深夜2～3時頃、今度は東京営業所に火をつけられました。倉庫は全焼です。発見したのは神保さんです。煙が出ているからと見に行ったら、もう手の施しようがないくらい火の手が上がっていたそうです。

——立川営業所は大丈夫だったのですか？

野村：当時の立川営業所は、建材など燃えやすいものであふれていた。火をつけられたらひとたまりもありません。そこで社員が泊まり込みで見張りしました。みんなで目つぶし用のスプレーや金属バットなどを準備して、もしもの時に備えました。「いつでも来い!」という感じでした。

川幡：(苦笑い)。

中島社長：警察も本腰を入れてくれました。

野村：本社と立川営業所にはしばらく警察官が待機していましたね。

中島社長：私たちも警察も、犯人の目ぼしは大体つけていました。ただし、放火は罪が重い。だから現行犯でないと検挙できないらしいんです。それで異例の警戒態勢をとってくれたわけです。警備員がもつようなマグライトを買って、会社に泊まり込んで、トラックに隠れて。みんな、若かったねえ。笑。

——犯人は捕まったのですか？

中島社長：結局、横領で逮捕されました。調べてみると、前に在籍していた会社でも同じような手口を働いていたやつでした。警察によると、かなりの知能

犯だということでした。

加藤：会長は社員の裏切りに相当堪えたようです。私は、鎮火した現場で壁に両手をついて嘆いている会長の姿を目撃しています。あんな姿はその前もそれ以降も見たことがありません。

野村：でも会長は「やられるほうにも問題があるはずだ」「犯罪を誘発してしまう仕事のやり方をさせていた責任がある」と言っていました。その通りだと思います。

中島社長：たしかにそうです。だから今は、「働かせ方」に配慮し、現金授受をきびしくチェックし、室長が管理することにしました。

野村：たいへんだったのはその後です。火をつけられた事務所は、煤の匂いがひどくて、事務員を始め、体調不良を訴える人が後を絶ちませんでした。

中島社長：中の備品をみんな買い替えたのに匂いがとれなかったんです。それで事務所自体を建て替えました（2008年3月）。

川幡：匂いだけでなく、みんなやつぱりこわかったようです。でも伝え聞くところでは、被害にあった直後の、社内のチームワークや結束はすばらしかったということでした。会社の電話が使えないから私用の携帯電話でお客様やドライバーと連絡をとったりとか。日常業務に加えて、火事後始末、被害の調査や復旧といった、やらなければならないことが山積していたはずですが、しかし、会社全体が、何が起きても仕事を全うしなければならないという使命感に燃えたと聞きました。

中島社長：あの時、印象的だったのは、ファイルというファイルを雑巾で拭き「だめだ、落ちない」と言いながらも手を休めなかった室長の姿です。でもみんな、片付けは早かったね。あつというまに事務所から荷物を運び出して。

野村：荷物運びは専門家ですから。笑。

未曾有の大災害に巻き込まれて—東日本大震災

川幡：3つめは、東日本大震災に被災されたドライバーがいかに苦境を脱したかというお話です。

加藤：2011年3月11日は日本郵政の北海道便の仕事で、昼頃に東京の郵便局を出発しました。私はいつも2～3時間に1度休憩をとります。ちょうど福島県郡山市のパーキングで休んでいた時、地震が起きました。ちょっとだらしないですけど、ハンドルに足をかけて仮眠をとっていたんです。ところが揺れがあまりに大きくて運転席の中を転がりました。前に停まっていた大型トラックなどは車輪が浮くくらい揺れていました。また突然、晴れていた空が真っ暗になり吹雪になったのをおぼえています。こわかったですね。

—それからどうされたんですか？

加藤：揺れが収まってすぐに、会社へ「行けるところまで行く」と連絡を入れましたが、それきり電話は通じなくなりました。ところが高速道路は閉鎖、下道はひび割れ、道づれ、陥没、です。私が運転していたのは10トン車です。街の灯りはすべて消えているし、橋は今にも落ちそうです。一か八かという局面が何度もありました。それでもなんとか、仙台まではたどりつきました。しかし情報がないので、そこから国道4号線を走った。これがまちがいでした。そこから青森まで丸1日かかりました。ところがフェリーふ頭へ行くと、数百台のトラックが待っている。沖にフェリーがいるんですが、津波警報が発令されていたので港に入れないんです。沖にいた船には、うちのトラックも載っていました。幾日も船上で待たされ、飲まず食わずだったそうです。また北海道側の港でもフェリー待ちしていた。津軽海峡をはさんで東邦運輸の北海道便3台が、立ち往生していたんです。

野村：一番困ったのは情報がとれなかったことです。私は茨城県神栖の客先から帰る途中でした。会社に戻ると、加藤さんとの連絡が途絶えていた。結局、生死もわからなかったのは加藤さん一人でした。心配した奥さんから問い合わせが来たんですが、答えることもできなくて。

加藤：石川県金沢市に住む従兄弟から携帯電話に連絡が入ったんです。東京からはつながらなかったんですが、地方からは大丈夫だったんですね。うちのかみ

さんが親戚中に連絡したようです。それで青森で公衆電話を見つけて、会社に電話を入れました。

——結局、北海道まで荷物は運べたんですか。

加藤：行きました。通常なら4日ですが1週間かかりました。

野村：加藤さん以外では燃料の問題が起きました。自衛隊など救援活動への供給が優先され、民間は後回しになったのです。復路のフェリーを下りると、日本海側の道路を走り、新潟から関越自動車道で東京へ戻るように指示されたのですが、通常ルートより距離があるので給油は絶対不可欠です。

加藤：私のトラックにはがタンクが2つ付いていたのですが、頼んでも1つしか入れてくれなかった記憶があります。

野村：会社自体はトラック用の燃料タンクがあるので全く走れなくなることはありませんでした。でも1週間くらいはみんなギリギリで走っていたのではないのでしょうか。燃料だけでなく、このあたりは計画停電の話もありましたね。だから、社長の知り合いから電池や発電機を送ってもらいました。

——素晴らしい連携プレイの数々が、困難を乗り越える原動力になったのですね。

渡辺：困難への対応には、ふだんからの対策が重要です。

野村：その場ではたいへんとは思いませんでした。「やらなきゃ」という気持ちしかなかった。

加藤：乗り越えることができたのは、やっぱり「荷物を届けたい」という使命感ですね。

